

「こわかったあの時のごう雨災害」

鹿児島県 奄美市立朝日小学校 4年 ^{あかつか} ^{しょう}
赤塚 将

ぼくは、3年生まで、山や川に囲まれた自然ゆたかな住用小学校に通っていました。1年生の時です。ゴーゴーという、耳がいたくなるほどの大きな音で雨がふっていました。学校の近くにある大きな役勝川がいっぱいになり、小学校のグラウンドに川の水が入ってくるのを、教室から見っていました。みるみるうちにグラウンドがプールのようにになりました。教室の電気がとつ然消えつかなくなり、水も止まり、水道やトイレが使えなくなってくると、とても不安になりました。学校には中学生や保育所の人、お年よりのおばあちゃんなど、たくさんの人たちがひなんしてきました。学校から下校できなかつたので、ぼくたちは学校の1かいに集まっています。いつもきゅう食を作ってくれる人が、きゅう食で余ったごはんとスープを持ってきてくださり、少しほっとしました。

夕方、お父さんが仕事でむかえに来ることができなかつたので、いとこのお父さんが学校にむかえに来てくれました。道路に出てみると、辺り一面が川みたいになっていてとてもびっくりしました。道路には、山から流されてきた木や土砂、水に流されてきたゴミがいっぱいで、道路が見えなくなっていました。ぼくは、ひざまで水につかりながら、みんなで家に帰ったことを今でもしっかり覚えています。

家に帰り着くと、知り合いがひなんしていました。

「大じょうぶだった。」

と聞かれ、ぼくはゆっくりうなずきました。その日、ぼくはお母さんと知り合いとで過ごし、お父さんは帰ってきませんでした。一日たって帰ってきたお父さんは、服はどろだらけでよごれ、顔はとてもつかれているように見えました。

ぼくは今、朝日小学校の4年生になりました。ぼくのお父さんは、建設会社で働いています。お父さんに聞いた話ですが、今でも、あの時のごう雨災害でひがいにあつた場所の工事をしているそうです。

また、砂ぼうダムについて聞いてみました。砂ぼうダムは、流れ出す土砂を止めたり、山のくずれやすい部分を保ごしたり、土石流を止める役割をするそうです。

土石流が発生する前は、山なりがしたり、雨がふり続けているのに川の水が少しへったり、にごったり、木が流れてきたりするようです。土石流の速さは、自動車が走る速さと同じぐらいで、およそ時速40キロと、とても速く、家や車も流してしまうぐらいの力をもっているそうです。

今の天こうは、昔とくらべて雨が強く、変わってきているようです。土砂災害のひ害も大きくなり、回数もふえてきているようです。ぼくは、

「自分の命は自分で守る。」

を合言葉に、危ないところからひなんする、みんなで集まって助け合う、あわてないように声をかけ合う、などをしたいようにしていきたいと思います。そして、この気持ちをいつも持って、家族や友達と一しょになって、土砂災害のことを勉強していきたいと思います。また、土砂災害が起きて、住用で経験したようにみんなで助け合いながら、協力してのりこえていきたいと思います。